

2 世紀アテネの変容とパンヘレニオン

桑山由文

後 2 世紀にギリシア本土のアテネは、ローマ帝国の「文化首都」とでもいえる存在となった。この変貌を主導したのは、ギリシア文化好きとして知られたハドリアヌス帝とされる。本報告は、彼が創り上げたパンヘレニオンという都市同盟に焦点を当て、この儀礼集団の発展が 2 世紀アテネの変容にどのようにかかわっていったのかを考察した。

ハドリアヌス帝はアテネに様々な公共建築物を建て、その都市景観を一変させた。その中でも特筆すべきは、アテネ南東部における大規模な都市開発、すなわちオリュンピエイオン（ゼウス＝オリュンピオスの聖域）の完成である。ペイシストラトスの時代以降未完成のまま、何度か工事の再開と中断を繰り返していたこの聖域を、ハドリアヌス帝はついに完成させた。これにより、アテネ南東部は、ハドリアヌスの「新しいアテネ」の中核として、新しい姿を見せることとなった。

しかし、ハドリアヌス帝のアテネへの恩恵は、こうした都市景観の変容にとどまらない。彼はギリシア文化圏におけるアテネという都市の位置づけそのものを変化させた。そのために創設されたのがパンヘレニオン都市同盟である。アテネはその盟主的位置を与えられた。もっとも、この同盟については、文献史料の言及が極端に乏しく、断片的碑文史料に依存せざるをえないため、その全貌を復元することは難しい。

現在判明している事実は、以下の通りである。加盟都市については、属州アカイアとアジアの都市が大半を占め、クレタなどエーゲ海周辺の他の地域の都市もいくつかは入っていた。ただし、その総数は不明であり、シリアや南イタリアの諸都市が加盟していた可能性もある。加盟要件は、都市の創建にギリシア本土の人々が関わっているなど、本土との何らかの歴史的つながりがあること、そして、ローマ帝国やハドリアヌス帝から何らかの恩恵を受けていることであった。加盟各都市は、4 年任期の代表（パンヘレネス）を何らかの手段で選出した。彼らはアテネに派遣され、評議会（シュネドリオン）を構成し、それをやはり何らかの手段で選ばれたアルコンが統括していた。アゴノテテースなどの他の役職もあったことは分かっているものの、具体的職掌は不明である。同盟の主任務は、4 年に一度アテネにてパンヘレニア祭を催すことと、それに関連してハドリアヌスをゼウス＝オリュンピオス（またはパンヘレニオス）として崇拝することであったようであり、政治的権限はほぼ有していなかったらしい。

このように断片的で曖昧な実像しか知ることのできないパンヘレニオンであるが、本報告との関連では、少なくとも二点がいえる。第一に、この組織は、属州アカイアに限定されることなく、ギリシア文化への帰属意識を持つ諸都市から構成されており、属州の枠を超えた組織で

あった。一つの属州内に限定されていないこのような団体がローマ皇帝の肝いりで組織されることは、少なくとも元首政期には大変珍しい。

第二に、パンヘレニオンが有したこの性格ゆえに、その盟主的位置に置かれたアテネは、属州よりも大きな枠組の中心的存在となった。ローマ支配下のそれまでのアテネは、属州アカイアの一都市にすぎず、属州中心地は、ローマ植民市コリントスの方であった。ところが、パンヘレニオン創設により、アテネはコリントスより上位に位置づけられたばかりか、ローマ支配下のギリシア文化圏で当時繁栄していた大都市、たとえばエジプトのアレクサンドリアやシリアのアンティオキアと肩を並べることすらできるようになったといえる。

本報告冒頭で述べたハドリアヌスの建築活動は、このようなパンヘレニオンの中核としてのアテネの役割と連動していた。近年の先行諸研究は、パンヘレネスの評議会がどこで開かれたのかを明らかにしようとして、オリュンピエイオンやアテネ郊外のエレウシスなど様々な地域を候補に挙げているが、実はこれらの地全てにパンヘレニオンは深く関わっており、議論は水掛け論の様相を呈している。むしろ、パンヘレニオンがアテネ市内のひとつの神殿だけではなく、複数の地域と関連していたと見なす方が自然と報告者は考える。しかも、これらの地はいずれも、古典期アテネと深いつながりを持った地域であった。パンヘレニオンは古典期という「過去の栄光」を、当時の都市アテネ全体に浮かび上がらせるという機能を持っていたのである。

ところがその一方で、パンヘレニオンが主催したパンヘレニア祭には、ハドリアヌスを神として崇拝するという性格が強い。すなわち、パンヘレニオンは、アテネに「過去の栄光」を復活させると同時に、そこで崇拝されているのは、ハドリアヌスというローマ皇帝である、という状況を出現させたのであった。ギリシア的過去とローマ的現在とが巧妙に接続されていたのである。したがって、しばしば先行研究が強調してきた、ギリシア文化の伝統に回帰するという復古主義的性格だけで、この都市同盟を理解するべきではない。たとえば、加盟要件にある、ギリシア本土とのつながりはあまり厳密には適用されなかったようである。また、既知のアルコンはいずれもローマ市民権保持者であった。パンヘレネスの多くについても、出身都市の都市参事会員層が大半という点以外、共通点は見出しにくい。非ローマ市民が少なくない一方で、イタリアからの植民者の子孫もおり、身分的にもローマ騎士身分から弁論家まで、様々な社会的地位の人々が含まれていた。すなわち、加盟都市やパンヘレネスにギリシア的純粋さはそれほど問われていない。きわめて多様な集団で、選ばれた基準を特定しがたいのである。

トラヤヌス帝期以降、ギリシア文化圏では、ローマ市民権保持者が急増し、ローマ風の名前を名乗る者も増え、元老院議員身分に進出した者も1世紀とは比べ物にならないほどになっていた。自身の先祖をギリシア本土に求められる人たちがばかりではなく、ローマや帝国西部に起源がある人々の割合も増加していたであろう。元老院議員時代のハドリアヌスはある意味、その典型とすることができる。自身のアイデンティティがギリシアにもローマにもあり、もはや単純に過去への「回帰」はできない。都市参事会員層ではとくに強かったであろう、そうした心性が、パンヘレニオンには反映されていたのである。このような人々にとって、ギリシア世界の栄光という「過去」とローマ支配下の「現在」とを接続してくれる、パンヘレニオンと

パンヘレニア祭は、精神的葛藤を感じさせずにローマとギリシアとをつなぐという効果をもっていたのではないか。

以上のような、パンヘレニオンの基本的性格についての考察を踏まえて、本報告は、ハドリアヌス帝期より後の史の変遷にも目を向けた。先行諸研究は、ハドリアヌス帝が意図したパンヘレニオン像の再構築にのみ関心が集中しているのであるが、実は、パンヘレニオンの創設は131年のオリュンピエイオン落成式よりも後であり、第1回パンヘレニア祭の開催はさらに遅い137年、すなわちハドリアヌス帝期末期なのである。つまり、パンヘレニア祭の第2回(141年)はアントニヌス=ピウス帝期であり、パンヘレニオンの本格的始動は、ハドリアヌス死後とみてよい。そればかりか、加盟都市もピウス帝期以降にはさらに増加しており、ピウス帝期以降、着々とパンヘレニオンは継承され、順調に運営されていたのである。

この発展を支え、可能とした人的要因として、本報告は、ヘロデス=アッティクス父子の役割に着目した。この親子は、ハドリアヌス帝期になって元老院議員身分へ登用され、急速にローマ中央、とりわけ皇帝家との絆を強めていったのであるが、それと同時に、アテネにおいても、オリュンピエイオン落成式やパンヘレニア祭、さらにはハドリアヌス帝が改革して大規模化させたパンアテナイア祭など、当時のアテネの諸祭典にも深く関わっていた。しかも、この父子は、エレウシスの祭司職を代々務めたケリュケス氏族に属した古い家系の出であり、パンヘレニオンと結びつきの強いエレウシスの秘儀にも深く関わっていたのである。

すなわち、親子二代に渡って、皇帝と太いパイプを有したアテネの神官家系である彼らこそが、パンヘレニオンに代表されるアテネ改造のブレーンの存在、もしくは現地総責任者であった。それゆえに、パンヘレニオンはピウス帝期、マルクス帝期と継承・発展され、都市アテネの変容も、ハドリアヌス帝の個人的趣味の発露に終わることなく、本格的「文化首都」化として結実したのである。

実際、ピウスからマルクス帝期にかけてのアテネにおける二大建築物であるスタディオンとオデイオンは、いずれもヘロデスによるものであった。先行研究は概して、皇帝から地元名士のヘロデスに奉獻主体が移ったとして、ハドリアヌス帝とピウス帝期以降とで、建築計画の連続性を否定する傾向にあるが、そうではない。この二つの建築物が作られた背景には、ハドリアヌス帝期以後、各地からアテネへとやってくる、諸祭典の観客や競技者の数が急増したことがあった。すなわち、ハドリアヌス帝期に端を発したアテネ変容が、ピウス帝期以降も順調に進み、それを受けて更なる都市整備が必要となったがゆえのものであった。富裕者の単なる郷土愛、エヴェルジェティズムの一環としてだけ捉えるべきものではない。2世紀アテネの変容は、ハドリアヌス帝期からマルクス帝期にかけてという長期的視野から考察しなければならないのである。